

東京医療保健大学大学院看護学研究科シラバス2026									
科目番号	51006	分類		履修者	高度実践看護コース	学年			
科目名	診断のためのNP実践演習						1		
	(Diagnostic skill Practice for Acute Care Nurse Practitioners)						配当数/シラ 後期		
担当者	○忠 雅之 他12名			区分	必修	単位	2	時間 数	カリキュラム 特定行為研修(実時間) 研修対応時間 39.0
授業の概要および目標							学位授与の方針と関連		
【概要】 クリティカル領域の医療現場で対応する患者のフィジカルアセスメントができ、特徴的な検査について、安全かつ確実に実践するための知識・技術を修得する。 また、クリティカル領域の医療現場で対応の多い特徴的な症状について、科学的根拠となるデータに基づく診察・診断の考え方、診断方法を想起しながら診断するプロセスを実践的に学ぶ。クリティカル領域の事例に対して確実な診断技術を身につけるとともに診断に伴うインフォームドコンセントが行うための力を身につける。 【目標】 1. クリティカル領域における必要な検査のオーダーとそのデータ評価ができる。 2. クリティカル領域の一般的な事例について診察・診断が実践できる。 3. クリティカル領域のトリアージ(重症度・緊急度の判断)ができる。 4. 検査、診断後の患者および家族への支援ができる。							○	1	クリティカル領域における患者の状況を総合的に判断する能力
							○	2	クリティカル領域における患者に必要な治療を実施できる能力
							○	3	患者に安心・安全な医療をタイムリーかつ適切に提供するために医師等との協働ができ、ネットワークを推進できる能力
								4	専門職としての倫理的判断決定能力
							○	5	高度看護実践者として、教育的経営的な視点をもつトップマネジメント能力
								6	臨床実践に密着知を形式知へと創出する研究開発能力
							○	7	クリティカル領域における患者の危機的状況を支援する能力
授業計画									
回	内容								担当教員
	I. クリティカル領域における必要な検査技術の実践								忠 他12名
	1) 腹部超音波検査の必要性の判断とデータ評価								
第1回	<講義> (1) 腹部超音波検査の必要性								
第2回	(2) 腹部超音波検査を行う上での基礎的知識 (3) 腹部超音波検査の方法								
	2) CT・MRI・PETの必要性の判断とデータ評価								
第3回	<講義> (1) CT・MRI・PETの目的								
第4回	(2) CT・MRI・PETの方法								
第5回	(3) CT・MRI・PET画像のみかた (4) 造影剤の点滴の施行とアセスメント								
第6回	<演習：東京医療センター検査部門にて> (1) 腹部超音波検査の画像評価								
第7回	<演習：東京医療センター放射線部門にて> (1) 事例を用いたCT・MRIの読影/PETの読影								
第8回	<東京医療センター放射線部門にて> (1) 血管造影検査施行時の介助の見学から介助方法を再考する								
第9回	・一時的ヘースメーカ、経皮的心肺補助装置、大動脈内バルーンパンピングに関する局所解剖・								
第10回	・一時的ヘースメーカ、経皮的心肺補助装置、大動脈内バルーンパンピングを要する主要疾患の病態生理・								
第11回	・一時的ヘースメーカ、経皮的心肺補助装置、大動脈内バルーンパンピングを要する主要疾患のフィジカルアセスメント・								
第12回	3) 動脈穿刺 (1) 直接動脈穿刺の方法 (2) 機軸動脈ラインの確保の方法 (3) 画像支援下における動脈血採血の方法(講義とシミュラを用いての理解)								
第13回	・動脈穿刺法に関する局所解剖 ・動脈穿刺法に関するフィジカルアセスメント ・超音波検査による動脈と静脈の見分け方・ ・動脈血採取が必要となる検査・								
第14回	・動脈ラインの確保の目的 ・動脈ラインの確保の適応と禁忌 ・穿刺部位と穿刺及び留置に伴うリスク(有害事象とその対策等)								
第15回	・患者に適した穿刺及び留置部位の選択 ・機軸動脈ラインの確保の手技(OSCE)								
	II. クリティカル領域の診察・診断の実践								
第16回	1) ショックの事例 ・直接動脈穿刺法による採血の目的 ・直接動脈穿刺法による採血の適応と禁忌 ・穿刺部位と穿刺に伴うリスク(有害事象とその対策等)								
第17回	・患者に適した穿刺部位の選択 ・直接動脈穿刺法による採血の手技 ・直接動脈穿刺による採血の手技(OSCE)								
第18回	2) 発熱、腹痛の事例								
第19回	3) 嘔吐・下痢の事例 ・輸液療法の目的と種類 ・病態に応じた輸液療法の適応と禁忌 ・輸液時に必要な検査 ・輸液療法の計画								
第20回	・脱水症状に対する輸液による補正に必要な輸液の種類と臨床薬理 ・脱水症状に対する輸液による補正の適応と使用方法 ・脱水症状に対する輸液による補正の副作用 ・脱水症状に対する輸液による補正の判断基準(△-△-△ミューションを含む) ・脱水症状の程度と輸液による補正のリスク(有害事象とその対策等)								
第21回	4) 脳卒中の事例								
第22回	5) 呼吸困難の事例 ・気管切開の目的 ・気管切開の適応と禁忌								
第23回	6) 胸痛の事例 ・病態に応じたカテコラミンの投与量の調整の判断基準(ペーパーシミュレーションを含む) ・持続点滴中のカテコラミンの投与量の調整のリスク(有害事象とその対策等)								
第24回	7) 外傷の事例 ・胸腔ドレナージに関する局所解剖 ・胸腔ドレナージを要する主要疾患の病態生理 ・胸腔ドレナージを要する主要疾患のフィジカルアセスメント ・胸腔ドレナージの目的 ・胸腔ドレナージの適応と禁忌 ・胸腔ドレナージに伴うリスク(有害事象とその対策等)								
第25回	8) 四肢の評価								
第26回	9) 頭部外傷の評価								
第27回	10) 手順書を用いたインスリン製剤の事例 ・糖尿病とインスリン療法に関する局所解剖 ・糖尿病とインスリン療法に関する病態生理 ・糖尿病とインスリン療法に関するフィジカルアセスメント								
第28回	III. トリアージの実践								
第29回	1) トリアージの概念と機能、方法								
第30回	2) 事例を用いた院内トリアージの実践 ・胸腔ドレナージに関する局所解剖 ・胸腔ドレナージを要する主要疾患の病態生理 ・胸腔ドレナージを要する主要疾患のフィジカルアセスメント ・胸腔ドレナージの目的 ・胸腔ドレナージの適応と禁忌 ・胸腔ドレナージに伴うリスク(有害事象とその対策等)								
第31回	3) 災害におけるトリアージ								
第32回	IV. 特定行為に係る看護師の研修制度及び手順書について								
第33回	V. 診断後の患者及び家族への支援								
事前・事後学習	事前学習：当日の課題に関し参考図書の内容を予習し理解して授業に参加する。 事後学習：授業の内容を配布資料と参考図書等で復習する。 単位と時間数に応じた学習時間(学生便覧参照)を参考にに取り組むこと。								
評価の方法	課題レポートにて評価する。その他に、筆記試験・実技試験(OSCE)および観察評価を行う。フィードバックは適宜行う。								
参考図書・資料等	◎1) 江原 茂：画像診断を学ぼう・単純X線からCT・MRI・超音波まで、 メディカル・サイエンス・インターナショナル ◎は授業の必須図書ですので、購入していただきます。								
備考	オフィスアワーについては、学生便覧を参照し、教員と日程調整をする。								